九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

寸懐(Ⅰ)

ロバート，キャンベル

https://doi.org/10.15017/10442

出版情報：文獻探究. 18, pp.6-59, 1986-09-18. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

ろうか。これもまた、異なる体系のアクセントが衝突してもたらされたアクセント変化の一現象だと考えたい。同様の平板型化傾向は、同じく筑前式アクセントの体系を有する福岡市西部域およびその近郊、[5]豊前式アクセントの北九州市などの若年層にも広く認められ、壱岐をも含む三地点共通の現象で都市部に限らぬ点重要である。

注

(1) 壱岐アクセントについては次の四氏の報告がある。平山輝男氏『九州方言音調の研究』（明治書院 昭和26年）、金田一春彦氏「対馬附壱岐のアクセントの地位―九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか―」（『対馬の自然と文化』（岩波書店 昭和37年）、奥村三雄氏「九州諸方言アクセントの系譜」（九州文化史研究所紀要23）、岡野信子氏「壱岐対馬の方言」（『講座方言学9』（国書刊行会 昭和57年））など。

(2) ●、○は高音、低音拍を示し、▽、▽は助詞「が」の高音、低音拍である。

(3) 福岡市中心部などでの、

	三類	一・二類	四・五類
広	○	●	▽
狭	●	○	▽

の体系ともつとみられる「博多式」と区別して、このように呼称する。

(4) 第四、五類は、壱岐の各地とも●○▽が大勢で変らぬゆえ、省略に従う。

(5) 稲川順一氏「筑前のアクセント」（語文研究 39号）、「福岡県諸方言アクセント」（語文研究 44・45号）参照。

(6) 岡野信子氏「福岡県の方言」（『講座方言学9』（国書刊行会 昭和57年））参照。

―山口大学人文学部助教授―

寸懐（Ⅰ）

ロバート・キャンベル

雑誌編集者の心労は千差万別、なかでも締め切り寸前の最終修正・校正は最も勇断を要するであろう。と言っても書く側の心配も決して少なくない。千慮の一失、つまらない字句の続きぐあいや誤字・誤用のために、たとえば学者なら学者は思いがけない難儀を掛けられかねない。近世からそのまま引継いだ問題のようである。例として、文政年間から流行した学者批評書には、常套手段として微細な文体分析を行い、指示語の不明さや「剰語」・「贅語」等を論難することによって、対象の有名学者・文人の揚げ足を取る仕組になった多くのものがある。「妙妙奇談」ものの作者のなかでも、一人、「頑愚驚驍（アバケモノ）」（「芸林可会録」）と生前からの不評をかえりみず、当時の文人墨客の不学を冷笑して、しかも同じ「妙々奇談」系統のものでは自分の過を容赦なくとがめられる畑時倚（毛義、後平亭銀鶏、文盲山人、燕石楼主人などと号す）が居た。天保六年三月刊の自作「銀鶏一睡 南柯迺夢」は、書画会など文人の催し物に出没する俗輩を、たとえば「去年もさる詩人の元より筆を贈りしに、上書に『津二対とかきてありしを、一人の気いたふり大に笑ひていへるは、何等の取込ありて認しや、『筆といふ字に竹冠なしとて咎めし人あり』と、「化ケ物会所」の大将に託して痛罵させ、地上の気風を嘆かせる趣向である。これに対して、天保九年一月刊「諸家必読出放題」（右「芸林可会録」の作者秋田藩〈49頁〈続く〉

えてもである。

そこでも、『人間一心覗替繰』の場合と同様に、粉本の趣向を根幹に配し、それに三馬独自のものを内面から加えていく方法をとっている。

最後に、『人心覗機関』に関しては、三馬が、全交の『十四傾城腹之内』の人間の内幕を見るという趣向に興味をいだいたことがうかがわれた。三馬は、読者の身近にいるような種類の人間をとりあげてその中味を暴露した。同じ全交作品を粉本として利用した一九の作品がドタバタや医書の引用に終始したのに比べ、三馬は町人という人間そのものに興味を持ち、それをできるだけ忠実に表現しようとしたのであった。そして、『人心覗替繰』においても、彼の興味は多少他へ移ったかもしれないが、『――覗替繰』の趣向をより発展させ、人の腹の内をのぞく、人の心の裏を書く、町人の類型を書くという趣向は残しながら、もっと対象に接近し、しかも詳細に描写を試みた。そして、彼は、『――覗機関』からいくつもの派生作を世の中に出していった。やはりここでも、三馬は、基になる作品の趣向を利用しつつ独自の新たな趣向をそれに加えて作品を作っていくというやり方を取っていた。

こうやってみていくと、戯作における趣向というものは、従来からいわれるような剽窃とか亜流とかで片付けられるようなものではなく、より細かく見ていくことにより作者ごとの作品づくりの有り方がうかがえて、興味深いのである。

――鎮西女子高等学校教諭――

〈6頁より続く〉儒善誰主人三木屋斎著）では、平賀源内の遺文集「飛花落葉」をちょうど三年前再板させた銀鶏は、やはり源内と引合され、罵詈雑言を浴びせられている。「既に酒屋の丁稚までが覚て居る実語教のはちめにも、聿と筆との同じきハしるしてあ」ることを、「寡聞固陋の證」とされる、などなど。

しかし、これだけ手を焼かれた銀鶏だが、生涯遂に正誤のくせを直さなかったらしい。安政二年の江戸大地震の際、罹災地を廻って取材した見聞録「時雨迺袖後編」（外題「安政見聞別巻」は、「梓に上せんの腹工なりしが、故有て心ざしを遂ざれハ、止事を得ず写本にて世に弘む」ことにした銀鶏の晩年作で、現在東京国立博物館の所蔵である。凡例に、著者の修正・校正にあたっての気苦労、苛立っている姿をうまいぐあいに彷彿させる一条があり、後者の叱正を恐れながら以下に翻字することとしたい。〈仮名・漢字体は原文の通り〉

一奥山四研注といへる儒家の弟子に、佐々木某なる者あり。此人頗書を能し、又誹諧を好みて、宜麥が門に遊ぶ。家貧にして、何事も心に任せざる餘り、余が平亭を訪ひて、筆工をせんことを丐ふ。幸百四五十丁許の物ありけれハ、是を出して頼ミけるに、大いに歡び持かへりしが、四日目に出来せりとて持參せり。早々開いて是を見るに、其書ハ如何にも見事なれども、誤字夥敷、かな、てにをは、の違ひ最澤なりけるゆゑ、原書に引合して其意を俞しける処、此人大いに不満の体ニて云けるやう、原書に真にて書たるを草に直し、〈59頁〈続く〉

助」（『中央公論』大6・9）「枯野抄」（『新小説』大7・16）など。その意識を反映した作品が書かれている。

(14)「白木蓮の樹蔭から―五月号創作の印象（三）」（『時事新報』大7・4・10）

(15)「盛衰記と芥川の作品とを読み比べてみた場合、前者に安定感があるのは是非もない。―略―かえって蒼然たる古色につつまれて見えるのだ」という長野氏の見解（(1)と同じ）を始め、海老井英次氏なども伝説を完全に超克しているわけではない、という見解（『別冊国文学―芥川龍之介必携』昭54・2）を示している。

(16)吉田氏の見解（『芥川龍之介』三省堂・昭17・12）を始め、鈴木美知子氏も「袈裟と盛遠」試論の中で、「この作品において芥川は偶像破壊という手段をもって袈裟と盛遠を描き上げた（『国文白百合』3号・昭47・3）と述べている。

―九州大学大学院修士課程―

〈49頁より続く〉草にて書たるを假名に直す位ハ、筆工家の持前なれハ、敢間違にも有まじとの答へゆゑ、おのれ少く積にさはり、然らハ一應御話し申べし。先第一省文の字を遣ふに、漢人の書来りしハ格別、日本製作の文字ハ、用捨有度物也。足下今雙を双と書、佛を仏と書たるハ能れども、澤を沢と誌し、出を出と誌し、圓を[1]と書給ひしハ誤りせ。此等の文字ハ倭俗の作る処にして用ふるに足ず。又昔といふ字に昔しとおくり、再といふ字に再ひとおくり、豫といふ字に豫めとおくり假名を付ること甚見悪し。〈中略〉原書にかかる誤りハなき筈なりとて、引合せ見せける処、當人彌分らぬ様子にて、是にても讀にかはりたることハ有まじとの挨拶ゆゑ、余も興さめて二言を出さず。此話しハ是にて恐惶謹言せ。されハ此書も所々に傳はれ、それからそれへと、写本の数重なるに至りなハ、字違ひ假名違ひハいふも更也自他の分らざる事も儘あるべし。最々なげかはしき事になん。

注、奥山四研（四娟とも書く。天保七年版「広益諸家人名録」などに出る儒者「井伊四娟」と同人物か。）は銀鶏の旧友で、文政末年に同じ谷中瑞輪寺の近所に居住し、また天保八年頃からは銀鶏の寓居していた前田丹後守（上野七日市藩）の本所屋敷の近くに居る。四研作文政十二年刊の「浮世名所図会」下巻を銀鶏の息鉄鶏が校訂をし、銀鶏が跋文を書いている。銀鶏お得意の座敷図の口絵に再三みかけられる人でもある。